

建立助成金、関係機関、遺族、会員等々の寄付金の御協力により、平成十二年十一月、黒御影石の立派な慰霊碑「平和の礎」を彦根市の護国神社の隣に建立、盛大な除幕式及び慰霊祭を挙行いたしました。今年平成十五年、はや四回目の慰霊祭を十月十日に盛大に行う予定で、現在準備を進めております。

### 【執筆者の紹介】

本籍地 滋賀県彦根市佐和町（旧・上藪下町）

現住所 滋賀県彦根市本町

生年月日 大正十三年七月二十日

家族構成 父 林 尚憲、母 千代信の長男として生まれる（四男四女）

学 歴 昭和十七年三月

旧満州国奉天市奉天第二中学校卒業

軍 歴 昭和十九年六月

徴兵検査により第二乙種

昭和二十年三月

大興安嶺東側のフラルキ教育隊入隊

昭和二十年八月十日

ソ連軍侵入により挺身大隊に転属

武装解除 昭和二十年八月十七日

武装解除（フヘトにて）、引続き收容所

へ

帰 還 昭和二十四年九月二日 舞鶴上陸

帰還する

（滋賀県 陌間 政雄）

### 終戦と抑留の記録

兵庫県 上野 恵 三

入隊以後の記述

軍隊手帳のほか、少々資料を持ってはいたが、

シベリア、イルクーツク北方七〇キロメートルの

シヤマンカ村での抑留中に発疹チフスにかかり紛

失してしまったので、うる覚えではあるが、脳裏

にあることを記述する。

## 軍 歴

昭和十八（一九四三）年十月 学徒繰上げ卒業

姫路搜索連隊入隊、戦車兵

十一月 満州佳木斯搜索連隊転属

昭和十九年一月 牡丹江省愛河搜索連隊転属

二月 特別操縦見習士官合格、待機

六月 同省石頭 戦車一連隊転属

昭和二十年六月 四平街混成福寿旅団歩兵第二大

隊第二中隊転属

以上

同隊は、九月上旬、朝鮮元山に転進する予定で

四平街戦車連隊跡に集結した。

二十年八月五日、物資補給の目的で奉天（瀋

陽）市に出張を命ぜられ、満州油脂、満州皮革、

渡辺製袋等、諸会社より種々物資を供給しても

らった。奉天駅で貨車二両に積載完了し、骨休み

のため八月八日夜、奉天ビル内の大和ホテルで同

僚と一献傾け、ほろ酔い加減で夜半宿舎に帰宅した。同夜は殊の外蒸し暑く寝苦しく、ラジオのスイッチを入れると、思いもよらん関東軍歌が流れて、続いて「ソ連軍が中立条約を一方的に破棄し侵入してきた。我が関東軍はこれに応戦中なり」と。

この放送を聞き私は青天の霹靂。怒髪天を突き、せっかくの酔いも一遍に吹っこんでしまった。

一夜明け、奉天駅まで行って見ると、昨日までの平穩無事の様相は一変し、阿修羅と化し、ごった返し、集結した物資はそのまま放置して帰隊せざるを得なくなった。

状況の変化で、我が部隊は新京防衛の第一線、満州工業大学構内に移駐し、ソ連軍侵攻に備えて付近に散開し陣地を構築した。新京（長春）市市街北方、自動車道側面に蝸壺（人間がやっと入れる穴）を十メートル間隔で掘り、敵戦車が侵攻してきた折、その穴より飛び出し、通称・アンパ

ン、手製地雷を持って匍匐前進し戦車に肉迫、それに投擲し侵攻を阻止する戦術である。この構築に約三日間を費やしたが、八月十五日正午、天皇陛下直々の御言葉があるということで講堂に集合した。

予想として「忠勇無双なる朕の皇軍は、断固としてソ連軍を撃滅すべし」という玉音と思っていたが、あにはからんや、「忍ヒ難キヲ忍ヒ……」という終戦の詔勅であった。しばらく体の力が腑抜けし頭の中が真っ白になり、虚脱虚無状態になった。

二、三日して予備役は召集解除になり、三々五々家路についた。残った者はそれからしばらく軍隊とはかけ離れた生活が始まり、日本酒、支那酒を飲みながら、今後日本はどうなっていくものやらと各自妄想に耽った。

九月中旬、ソ連軍の指示で、一個大隊ごとに移駐を命ぜられ、我が軍隊も、七、八〇キロメートル離れた興主嶺に転進出発した。途中、揚木林で

一泊、翌朝到着する予定にし、同日、同地の合作舎の一室を借り受け、明日はソ連軍の軍門に入るので最後の晩餐会を開くべく、各自所有金を拠出してもらい、酒、豚、肉、野菜、コウリヤン等を購入し、午後七時、やっと準備完了した矢先、他の中隊将校、下士官二人がやってきて、「ソ連人が侵入して来たがいかに対処するか」と相談に来た。我々としてはどうすることもできない。現在地で武装解除されてもいたし方なし。それより前に腹ごしらえが先と食事をすることに決まり、二人に帰ってもらった。

その二、三分後にソ連兵四、五人が表裏戸両方から自動小銃を乱射しながら侵入してきた。余りにも突然の出来事で、生きた心地はしなかった。誰言うもなく両手を頭上に挙げた。降伏の印である。武器は室の中央に集められ、しばらくして彼らの略奪が始まった。

ソ連兵が私に向かって「チャスイ」「イエス」と聞いたので、支那語の「茶水」と思い水筒を渡

すと激怒して、自身の腕をまくり上げた。なんと、その腕に時計が二十個ほどはめられていた。すなわち「茶水」ではなく「チャッサー」、時計をよこせということであった。私もここでシーイマの腕時計を略奪されてしまった。

かれこれ夜の十時ごろ、まだ汽車は運行しており、宿舎付近の駅に列車が到着した。瞬間、バーン、シュー、機関車に弾丸が一発命中し、蒸気が排出すると同時に貨車じゅうの軍隊とソ連軍とが私たちの宿舎を中挟みにして激しい銃撃戦が始まった。約二時間、小銃、機関銃、砲の弾声。喉はからから、夢遊病者のごとく生死の間を彷徨した。

翌朝、銃声もやみ、ソ連軍の指示により飯盒ただ一つ持たされ、室外に連行された。出てみてびっくり仰天、車中の部隊は北支派遣軍。満州国有事に際して先遣を命ぜられた一個大隊で、終戦については一切関知せず、先方が発砲したからこれに応戦したまで。我々は全く困惑した。

約四百人、外蒙方向に連行された。一〇キロメートルほど行ったところで双方誤解を認め、また来た道を逆戻りし、戦場に立ち寄り、戦死者を埋葬した。

昨日来訪の将校、下士官の二人の霊に心から哀悼の意を表わした。翌日、興主嶺の本隊に合流した。

九月二十日までは自由奔放な日々を過ごしていたが、二十一日、急遽ソ連軍が進駐してきてから外出も禁止され、捕虜の憂き目を感じ始めた。

約六百人が貨車に積み込まれ、日本へ帰すという触れ込みではあったが、疑念を持ちながら車中の人となった。

九月二十六日、ソ満国境、黒河に到着し、船で対岸のソ連領、ブラゴエンチェンスクに上陸した。驚いたことに、ソ連といえども白色人種で、私たち東洋民族よりも生活レベルは上という先入観があったが、子供は素足で歩き、古自転車のリムを手回して遊んでおり、住居は白亜の殿堂とは

ほど遠い煉瓦に石灰を塗った粗末な建築であつた。

四、五日かかりバイカル湖湖畔、イルクーツクに到着下車。約半数の人員は当地より七、八〇キロメートル北方シャマンカ村に徒歩で到着した。

小さな川向かい、丸太で囲み、四方に望楼が建ち、約五百平方メートルの三棟、元ソ連囚人収容所に監禁された。これから五カ月間、言語に絶する苛酷な抑留生活が始まるわけである。

十一月三日は明治節であつたので作業は休止、舎内で休養しているといきなりソ連兵がやって来て「ダバイダバイ、ラボーチラボーチ」と言つて、家畜でも連れ出すように作業に駆り出された。これが抑留の第一歩である。

## 衣

ソ連囚人の使用していた上着、ズボン、下着、手袋、長靴、小物など使い古したものが支給された。寝具は満州から持参した毛布。

## 食

持参した多量の食料は没収され、それからはソ連の給与。朝は小豆粥、昼は携行黒パン一片とスープ、夕食は黒パンとスープ（塩練少量入り）。

## 住

丸太で組んだ二段床、暖房はペーチカ、燃料は自分等が伐採運搬したもの。

## 作業

五時起床、六時半収容所整理、点呼、八時、山林現場に到着。ソ連兵監視のもと、管理人の指示に従い二人一組、手斧、鋸が支給され、直径三十センチほどの松材を二、五メートルほどの長さに切断、二立方メートル単位に集積する。

昼食時は休憩し、五時、作業終了する。帰所する六時ころにはとっぷり日が暮れ暗やみ、朝星夜星を眺めての作業の毎日であつた。

二十年十一月から二十一年二月までの四カ月間、酷寒零下三〇度、食パン一片の重労働。捕虜という精神的抑圧、まさしく生き地獄であった。

なお、これに輪をかけた出来事に遭遇した。シラムの媒介による発疹チフスの流行。大半の者はこれに感染し、私も例外なく伝染し、高熱四〇度が四、五日続き、意識不明になった。約十日間ほどして回復はしたが、栄養失調になり、体重も四十キログラムに落ち込み、歩行も困難な状態であった。

幸運にも私は三途の川の一步手前で川を渡ることなく生き長らえることができた。しかしながら、若き前途有望、優秀なる戦友百余名の尊い生命が無残にもイルクーツク北方七〇キロメートル、シヤマンカ村で草木とともに朽ち果て逝ってしまったことは、何をさておいても残念至極、諸行無常。ただただ心から英霊の冥福を祈るのみである。

三月中旬、どんな事情かは不明であるが、ソ連

収容所長が更迭、シヤマンカ村からイルクーツクのミヤソコンビナートに移駐した。

これが思いがけない体力復調の原因になった。

工場の業種は、牛、山羊、綿羊等、家畜の屠殺業で、これを食肉、毛皮、動物脂肪に分類加工すること、この工程に我々は配属された。ソ連軍医・マイヨールが来所し、待遇も好転した。

栄養補給に、我々各人が作業中、ソ連人の監視の目が届かぬ所で肉片を隠し持ち帰り、暖房用スチームパイプの上に乗せて焼肉に加工し、これを副食として飽食した。夕食時は、動物の脂の臭気、煙で一大焼肉工場と化した。ソ連側はこれを見て見ぬふりをしてくれた。これは、軍医の思いやりであったと聞いている。お陰で体力もめきめき回復してきた。

そのころ、他のラーゲルから転属して来られた伊藤武雄氏から、四、五人相集い次の有益なる講義を拝聴した。

①石原莞爾氏の天皇陛下に上奏された「日本国

防論」の草案作りのこと

②マルクスの資本論

③片山潜の「日本共産党史」

以上の他、種々ありがたい講義を受け、大いに心の糧となった。

二十一年十二月「突如、日本ダモイ」の話が浮上し、同月中旬貨車に乗り込み、ナホトカに向かつて帰路についた。途中、沿海州一帯が凍結し船の航行が不能になり、帰還が一時延期になった。その間、とりあえずマルタ地区で下船し、また伐採作業を行うことが決定した。

作業は、前回と異なり大したノルマはなく、比較的楽な仕事であった。

二月十二日、私はちょっとした作業ミスで左足に原木が落下し、複雑骨折の重傷を負いイルクターク捕虜病院へ入院した。約半年間の入院、加療生活を終え、二十二年八月二十六日、高砂丸に乗船、待望の夢に見た舞鶴港に入港した。

この客船・高砂丸が立派に病院船として現存し

て活躍している現状、看護婦さんのかいがいしく働いている美しい姿、ただただ感謝感激あるのみ。

鏡のように静かな舞鶴港に、エンジンの音も軽やかに粛々と、兩岸の松の山林の間を縫うように船は入港していった。まさに一幅の絵巻を見るような思いがした。

「国敗れて山河あり」、やっと帰ってきたという実感で目頭が熱くなった。そして、これから「今様浦島」ではないが、厳しい現実に向き合っていくわけである。

【執筆者の紹介】

上野恵三氏は全抑協の氷上支部にあって、シベリア関係の運動に活動されています。

旧日本軍の中堅幹部として、隊員を指揮した軍歴を有しています。

「終戦から抑留までの記録」をまとめられましたので体験者の手記として兵庫支部から提出いた

します。

(兵庫県 芦田 史朗)

## 私の戦争体験記

鳥取県 原中 宣夫

(旧姓 森高)

### 終戦

昭和二十(一九四五)年五月二十二日、満十九歳。繰り上げ徴集により満州国黒河省璦琿第六国境守備隊に現役入隊し、二カ月余りの初年兵教育が終わり、璦琿の南西約五十キロメートル先地点にある二站の野戦陣地で、ソ連を「仮想敵国」として散兵壕、対戦車壕掘り等、陣地の構築作業をしていた。ある日、「ソ連軍が侵攻してきたので直ちに陣地に戻って守備に当たれ」と命令があり、慌ただしく野営地を後に夜行軍に移った。途中、不気味に空を焦がす火の手が数カ所から上が

るのを見ながら異常な緊迫感に包まれ、休む間もなく歩き通し、ようやく陣地西口に着いたのは昭和二十年八月十五日朝方だった。

東山陣地へ到着した第一中隊は、その主力を東山陣地中支点及び左支点到置き、その他は右支点到に配置された。私はこの右支点的の配備について。このとき私が手にした兵器は、三八式歩兵銃と木箱型の対戦車攻撃用急造爆雷であった。帯剣も鉄帽もなく、戦闘帽をかぶった何とも奇妙な戦場の姿であった。これは急増爆雷を使う「肉弾要員」なのだと、ひそかに覚悟を決めていた。しかし、それを使う機会は一度もなかった。幸運と言うべきか。

八月十七日、両軍の砲撃が次第に激しくなり、北東方向から多数の戦車に従いソ連軍が押し寄せ、やがて右支点先端部守備の我々(赤木班長以下五人)の正面にも、対戦車壕を越えて次々とソ連軍が斜面を攻め登ってきた。「撃て」の号令を合図に射撃を開始し、耳元を掠める弾丸の音に一